

デジタルフォトグラファーでエバンジェリスト

休ギアアップしないまない男、 早川廣行

柴田忠男＝構成

目次



早川廣行さんは、デジタルカメラによる作品制作と普及啓蒙に情熱を傾けている広告写真家である。日本で発表、入手可能なデジタルカメラのほとんどすべてのテスト撮影と実用化への検証をおこなってきた。スタジオにはいち早く3ショット型と1ショット型のプロフェッショナルデジタルカメラを導入し、多くの人にその可能性について熱っぽく語って来た。正に、デジタルデータの宣教師である。早川さんは無類の「いい人」で、怒ったりイライラしたりすることは皆無。スタジオは労働環境も優れて、スタッフは居心地も良い。ただ、年中無休の働き者という点でスタッフは全然気を抜けないので困りものだという……。

- ➔ 本当に年中無休の人なのかという謎
- ➔ 体は怠けたるが……
- ➔ 早川さんに仕事が集中するわけ
- ➔ デジタルカメラ研究会のお知らせ

本当に年中無休の人なのかという謎

■柴田 早川さんは、年中無休であると噂に聞いたことがあります。

●早川 基本的には、正月の三ガ日は家で一応のセレモニーがありますから、それを外すと人非人として(笑)家族から見放されますから、それだけはちゃんと休みます。それから、冠婚葬祭その他もろもろありますが、それ以外は日曜日以外も休まない。気持ちの中では362日間は働く。働くというより遊んでいるといったほうがいいでしょうけど。

■土日もこのスタジオにいるのですか。

●はい、この場所にいたりいなかったりしますが、いずれにせよ仕事に関わることをしています。そういう態勢はずっと変わっていません。

■いつからそうなったんですか。

●1993年からですね。このスタジオ(ABCスタジオ)は1994年頃からですから、まる3年たってます。ここに来る少し前からですね。写真家に加えて著述業としての仕事を始めてから、そう言った方が正しいかと思います。写真家としての仕事も決してヒマではなかったもので、それはちゃんとやりながら、デジタルにめざめて著述業的なことを始めました。そしたら、書く暇がなくなって。いずれにせよ、私生活を犠牲にしない限りやれないだろうということを悟りましてね。それも、自分ではそんなに長い期間ではないと思っていたんですよ。

最初の『フォトショップ実践マスター』という本のときですね。グラフィック社の太田さんという編集者が向こう見ずにも、それまで何も文章を書いたこともないただの広告写真家に、全面的に任せるからやってくれて話を持ち込んできた。おもしろそうだからやりましようってやり始めたら、そうはんばなものでは



●——「印刷・出力実践マスター」
グラフィック社刊 4500円



●——六本木のレストランで食事していたらサインしてくださいと言われた。松本零士さんと間違われたらしい。

ない。本を一冊作るなんてことは極めて大変なことだということを感じて、本当は放り出したかったんですけど(笑)、約束した手前、ギブアップだけは絶対にしない。

いまだかつて、私はギブアップしたことはない。どんな過酷な条件であろうと、どんなことであろうと、受けたからには必ずやり遂げるというのが信条ですから。結果がいいか悪いかはあとで反省すればいいことで、とにかくやってみようという姿勢で生きてきましたので、そのときもギブアップせずにやろうとしたら時間がなさ過ぎる。時間がない中でやるためには睡眠時間や遊び時間の、私生活を切り詰めるしかないということがこういう生活スタイルの始まる発端です。

締め切りを多少延ばしてもらいながら、一冊目の本を出した。そしたら、書いてる途中で、これは一冊で終わらせてしまったら読者に対して大変に失礼だと感じまして、読者の求めている部分もちゃんと書かなければいけないので二冊目の本にとりかかり始めた。ということで、とりかかり始めたら「コマーシャル・フォト」からデジタルカメラの記事を書くのに協力してもらえないかという話が来て、レギュラーではとって無理だと思うけど、単発でだったらいくらでも協力しましょうと。

いずれにしろ、写真家の中にこれからデジタルフォトグラフィを根付かせるためには誰かが一生懸命啓蒙活動をやらなければ、デジタルフォトって面白いよと言わなければ伸びるはずがないと思ったし、それなら自分がやるしかないかなと。実際にやってみて、ものすごく大変で、従来のカメラマンが越えなければいけない壁ってのがすごくあって、自分は苦勞して独学で越えましたが、独学といいながらまわりの人の助けがあって越えられたわけですけど、そういうチャンスのある人はいいけど、ない人は大変だろう。誰かがやら

なければならぬ。たまたま私がやっているのだから、やろうと。しかも、テキストを書いてくれという人もいるのだから。

ということでやり始めたら、いずれにせよ、時間がない。時間がなくて忙しいといっても、結局人間の体は、生活のリズムに慣れていけばそんなに大変じゃないんですね。不規則な生活をするからよくないのだということですよ。1年362日間働くというのは、逆に言えば戦前の日本人はみなそうしていたわけで、正月とお盆にしか休まずに働らいていたんですから、ご先祖様は。それで長生きしている人もたくさんいる。だからこれは問題ないだろうと、かえって長生きするんじゃないかと(笑)。そういう考え方ですね。体を怠けさせないということ、自分でそう決めたんです。

当時著述関係のことを始めたのは、ひとつに啓蒙しなければという使命感みたいなものがあったということと、実は本業の方がけっこう忙しくなくなってきたのです。広告写真の業界が、広告そのものがダンと落ちまして、広告予算が年間で1/3くらいに落とされるのも当たり前な時期にちょうど重なっていて、本業の方がけっこう少なくなってきたので、逆に著述業の方に時間が割けたという事実もあるのです。

その後も、毎年1冊のペースで単行本を出してきていて、あとは雑誌で記事を不定期に書いているという状況の中で言うと、その分を土日にあてればいいと。土日は会社は一応休みですから、あてればできるだけだろう。私の場合テキストを書くだけでなく、ビジュアルも入ってきますから、その絵を作るにはきちんとしたカメラとコンピュータがあるところでやらないとだめなので会社に出てきている。最後の仕上げで、文章を書くだけのときは家でもできるのですが、それでないときは、必ずここに出て来るのですから、一年362日出ているという話になってくるんですね。

体は怠けたがるが……



●——「デジタルカメラ活用の現場」
山名一郎と共著 エーアイ出版 2800円

■（ほとほと感心して）す、すごいもんですねえ。

●362日って、ウソだよ（笑）。比喩的な話なの。本当は年に一回は女房サービスも含めて、作例を作るための取材で海外に旅行しますし、当然仲間うちの旅行などに誘われて行くし、講演が年に30回くらいありますから、それは都内でない場合も多いから出掛けますね。よろこんで行きますよ。だから362日スタジオにいるという意味ではなく、362日臨戦態勢でいるという話です。海外旅行も実際は作例をたくさん撮ってくるので、仕事といえば仕事。

でもね、現実にもっとウソがあるのはね、ぼくは自分で仕事していると思っていない。やってることは遊びの延長ですから、すべてのことが。もともと遊びを仕事としているので。だから、逆に362日遊んでいて、3日間だけ真面目に家庭の夫であり父をやっていると、そういうことだと思います。

□（柴田の解説）スタジオのある有明1丁目は、有明のテニスの森公園のそば。国際展示場ができるまでは陸の孤島みたいなところだった。ゆりかもめの有明駅から徒歩12分くらい。月島倉庫（阿部木材）と書かれた大きな物流倉庫の中にある。

■ここへ通うのには、どうしていますか。

●去年4月に湾岸が開通してからは、通うのが非常に楽になった。千葉県の鎌ヶ谷市からなんだけど。1時間くらいで通えるようになったので、車で来ています。それ以前は、けっこう大変でした。1時間半から2時間かかるので、車はなるべく避けて電車で通っていました。

■お帰りの時間は何時ごろですか。

●いまは10時くらいかな。ここを出るのが。9時ごろには帰ろうと、努力目標としてみんなと話しているんですが。いまは書籍を書くのをかかえていて、やり始

めているんだけど、忙し過ぎて、とても1年に1冊出すのは無理なので、ちょっと休止しています。休止すると精神的にもかなり楽になって、とにかく日帰りしているんですよ。書籍を書いているときの追い込みになると、3カ月間くらいは1日48時間態勢を敷くんですね。1日おきに家に帰っている。そこらの寝袋にくるまって寝るんです。

■年中臨戦態勢のトップだと、スタッフは休むひまがないでしょう。

●(スタッフに向って)全然気が抜けないよね(笑)。

■今日は土曜日なのに。土日休みではないのですか。

●土日は休みです。福利厚生はきちとしていまして、健康保険も社会保険も厚生年金もありますし、当然勤務時間は1日8時間だし、週に40時間くらいですから。

■えっ、今時そんなスタジオあるんですか。

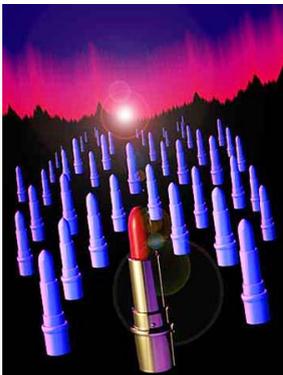
●たてまえは。労働協約はそうしています。

■今日は休みの日に、みんなでなにかやっていますね。

●やっていますね。実は明後日から恒例の海外取材をやりますので、いなくなるんですよ。今年はスペインです。ところが締め切りがありまして。その作例を作らなければいけないので。明日の夜中までやって、朝家に帰って、そのまま成田に行くようになると思うんです。

■土日が執筆で、平日は仕事という態勢というのは守られていないようですね。

●守られていません。気持ちの中でそうしようとしてきたんですけど、実は土日に広告の仕事が入ってくるんです。月曜日までにどうしても仕上げなければいけないというスケジュールで。土日に本業が食い込むので、副業の著述が土日だけというかたちでは済まなくなってきた。平日にも著述をやりながら、本業も土日に食い込んで、ベタになってしまった。著述に関してはスタッフの手をわずらわせることなく、8割



●——早川廣行作品 口紅



●——早川廣行作品 曼陀羅

方わたしひとりでもやれるので、普通だったら土日は社員は休ませて、わたし一人で出てくればいいやという感じだったんですよ。従来は。

■そういう理想的なことはあったんですか。

●大分前にはありましたよ(笑)。

■いまスタッフは何人ですか

●わたし含めて5人でやってます。いまは人手不足を機材で補っています。一人3台か4台使いながらというかたちで動いている。女房は経理担当重役。毎日一緒に来ている。車で来ている理由はふたりで出てこられる。女房に運転してもらえる。車の中で本を読んだり、コンピュータで書いたりできるので非常に楽で。

■そんなに忙しくしていて体は大丈夫ですか。

●ヒマにしたり、忙しくしたりするのが体によくない。本当を言えば、体を怠けさせてはいけない。体は休みたがるものだから、休まないようにしておけば、体もそんなもんだろうと思うでしょう。リズムを崩さないようにすることが重要。

■私は仕事で椅子に座ってばかりいるので、腰が痛くなりましたが。

●立ってやるんですよ。10時に来て夜中の10時に帰るまでの12時間。こうやって座っているのは、飯を食べるときと、人と話すときだけ。それ以外は全部立ってやる。それがうちの原則です。そうすると腰には来ないよ。足には来るかもしれない。スタンディングオペレーションシステムと称して、もう6年くらいやっているスタイルですけど、非常に調子いいんです。これやっていると徹夜する気にならない。遅くなってもいいから、ケジメつけて終わらせるというふうになる。立ちっぱなしで徹夜ってけっこういやになっちゃうと思うもの。

早川さんに仕事が集中する理由



●—デジタルスタジオ

□どうやら、いま余裕のないくらい仕事がバンバン来るようだ。今のスタッフでこなしきれないかなくなってうくらいの仕事量はある。受ける気になればもっとたくさんあるが、なるべくセーブしているらしい。それは早川さんだから忙しいのである。業界の景気は下がりっぱなしである。誰に聞いても仕事はないという。なぜ早川さんのところに仕事が集中するのか。

まずひとつ目は、現役の写真家として広告写真を撮影かつ画像処理含めた部分まで一貫して自分でやり、その企画の段階までからんできちんとしたことができるからである。ふたつ目は、それを裏の裏まで本に書いて提供してしまうという姿勢だ。そして、セミナーなどの依頼も断らずにせっせとやっているということ。この3つを併存させてやるのは相当大変だと思う。普通の人はやらないと思う。このことは業界でよく知られている。

早川さんのように、どんどん作品を作る現場の職人をやりながら、外にもちゃんと広めていくようなことをやっている人は非常に少ない。早川さんは「私はそれが自分のスタンスだし、どっちかという売り物だと思っているから、それが売れる間は3足の草鞋を履いてやろうと」と、どれもまんべんなく大事にしている。なかなかできることではない。

実際にいま、デジタルカメラを使って広告写真の仕事をしている会社はいくつかあるが、個人では限られた人しかやっていない。アクティブにやっている人は少ない。だから、デジタルカメラの利点をうまく生かしてやっている、早川さんのような人のところには仕事が集中している。仕事が仕事を生んでいるかたちで、たいして宣伝しなくても仕事があるようである。デジタルカメラを使った制作では、クリエイティブ系と、量

産系がある。早川さんの仕事は基本的にクリエイティブ系で、量産ものはない。仕事の90数%がデジタルがらみである。

■デジタルで作って、納めるのがポジというケースが多いとか。

●未だに約2割がポジ入稿ですが、データ入稿が増えてきています。

■ほんとはデータで入れたいでしょう。

●絶対に(力強く)データで入れたいです。データが一番いいのはポジ出力する時間が必要なくなる。ポジ出力は最低1日半もらっている。データ作って出力センターに出して、上がって来てよくなかったら出し直しするチャンスがもらえるのは、ぎりぎり1日半か2日です。中1日くださいという言い方をしています。データだったら中1日不要でそのまま渡してしまって、校正刷り出してだめなら直すということですから。中1日で3日から4日の間をカットできる。全体の流れの中で3~4日カットできるから何ができるかという、制作期間が長くなる。ギリギリまでできる。データ入稿ですよと言われると、作る側では余裕ができた、丁寧な仕事ができるなって感覚になる。

■ところで、たった今は何やっているのですか。

●雑誌原稿用の作例です。フォトフェーズプラスでここまで撮れるよという作例ですね。

□さまざまなデジタルカメラで、最高性能を発揮した写真を撮れて、しかも作例として美しいと思わせる写真が撮れるデジタル系のカメラマンは、早川さんの他は数えるほど。

「やる人がいても、雑誌の原稿用にはやらないと思う。一桁ギャラが違いますから」と早川さん。実は柴田も「SUPERDESIGNING」の時代には、その一桁足りないギャラでお願いしていたのだった。

■同業者向きのセミナーもあるんでしょう。



●—ABCスタジオ

●同業者に向けて言いたいんですよ。今のんびりしていたらデジタル化したときに仕事がなくなってしまう、今の状況で行ったら、あと10年くらいはデジタルカメラを使いこなしてデジタルデータのきれいなものを作る技術というのは簡単にはならない。それなりの知識と経験を要求されるよ、いち早く身につけるべきではないかと言っているんです。

■それって、早川さん4年前に言ってますよ。

●言ってますね。今からの10年が問題です。というのは4年前と今とくらべてやさしくなったかということ、全然やさしくなっていない。4年で変わっていないのだから10年でどうかなって気がしますけどね。

■セミナーでの反応は？

●残念ながら、カメラマンが参加しているケースが非常に少ない。

□このあと、デジタルデータの技術的な話をしたのだが、この欄は〔人物〕を紹介するのが目的なので、非常に大事な話だったが敢えて割愛する。

■ここ数年のデジタルフォトグラフィ関係の変化はありますか。

●向こう3年でフルカラーのデジタルデータ入稿がそこそこのパワーに、理想的に言えば5割くらいになるだろうと「希望」しています。そうじゃないと、従来の方がいいよって話になってしまう。何も好き好んで、手間がかかって、お金も余分にかかって、失敗ばかりして、品位が悪いフルカラーデータ入稿なんてしたがる人は出てこない。でも、どこかふっきれないと。3年くらいでフルデジタルのラインが、アナログよりは多いか、半々くらいになるはずなんですよ。ならないとおかしい。私自身は、デジタル化したことによってクリエイティビティは非常に高まった。デジタル化してメリットのあるのはそういう部分だと思う。結果として、アナログ時代よりはるかに忙しい人生を送っています。



● 早川さんのホームページにあったカッコいい早川さん

■ところで早川さんはいつも穏やかですが、怒ったことがありますか。

●自分の中で怒っていることはいくらでもあります。自分自身に腹がたつ。なんでこんなことがわかってなかったのかとか、こんなはずじゃなかったのにとというときの怒りってあるんですけど。

■スタジオで、スタッフの段取りの悪さなんかで我慢できないことあるんじゃないですか。

●作家の立場からは、段取りが悪いなと思うときはいくらでもあるんですが、教育者としての立場、指導して育てるということか頭のなかに四分六でありますから、怒ったってしょうがないと思う部分があるんですよ。教育者の自分はね。ものごとがスムーズに行くことはありえない。作家としては、自分ならもっとうまくいくのに何だこれはと思うことはあります。それとの兼ね合いですね。でもね、怒る人は自分自身に余裕のない人だよ、見てると(笑)。

■怒らない男・早川廣行というのも伝説になりますね。

□早川さんのホームページ「早川廣行の世界」には、デジカメと銀塩どころが違う、デジカメ運用のノウハウ、モニタキャリブレーション、解像度と色深度の早見表、プロ用デジカメの独断的 분류、プロ用デジカメの特徴と解説などの記事があり、非常に参考になる。また、ギャラリーのページも充実している。

●

早川廣行プロフィール

1945年東京生まれ。東京総合写真専門学校卒業。1966年より早崎治氏に師事。1971～1973年ヨーロッパ遊学。1973年ハヤサキスタジオ入社。1985年独立、ハヤカワスタジオ設立。1986年マッキントッシュ導入。1994年「フォトショップ実戦マスター」(グラフィック社)刊。日本広告写真家協会会員。日本写真芸術学会会員。

デジタルカメラ研究会

《ユーザーが語る業務用デジタルカメラ》

参加する人が対等に意見を交わすことができる勉強会 参加無料

毎月第一土曜日に開催予定

主催：株式会社スタジオエビス

共催：デジタルカメラ研究会

協賛：社団法人 日本広告写真家協会

日時：平成12年12月6日(土曜日)午後1時より5時まで

場所：渋谷区恵比寿-9-2 スタジオエビス3階(スタジオNO.1,6)

予定内容

*業務用ハイエンド・デジタルカメラ主要機種の比較(パネラーの方々に現在ご使用のカメラを持ち込んでいただき、実際に使用者しか判らないことまでお答えいたします。予定機種：Kodak-DCS465/EOS・DCS1/Leaf-DCBII Live/Catch Light/Carnival 2000/Fotex-F10/Phase One-Studio Kit/Power/Phase/Bright/富士DS300他)

*各機種テスト撮影及びプリンター出力(二カ所の商品撮影、一カ所のモデル撮影のセットを御用意致し、ご来場の皆様にも出来るだけ撮影が体験できるよう心がけています。プリンターも数機種ご用意し、その場でプリントいたします。なお時間の都合でプリント、データのお持ち帰りのご希望に添えない場合がありますのでご了承ください)

*デジタルカメラに関わる問題点を解決(経験豊富な、各機種をご使用のパネラーがどのように問題を克服し、日常業務に利用しているかを体験に基づいて参加者の質問にお答えして行きます)

研究会メンバー(阿部充夫、江戸明弘、小川勝久、金田秀樹、小森修、佐藤希以寿、田中儀一、塚田博正、永嶋サトシ、早川廣行、松本明彦、美崎新治、矢部國俊=敬称略、50音順)

その他にも複数の参加者が皆様のご質問にお答えする予定です。この勉強会は有志が集い、手弁当により開催いたします。ご賛同いただける個人、法人、のご協力は謹んでお受けいたしたいと思っております。

詳しくは連絡事務局まで